

◆左京三条六坊(興福寺西域)の調査 —第293-6次

1. はじめに

本調査地は、現・三条通りと小西通りの交差点から北に入った小西通り東側に面し、左京三条六坊十二・十三坪にあたる。十三～十六坪の四坪は、興福寺西門外の旧境内地側近であって、奈良時代、興福寺の菓園・園地が置かれていたとされる。調査区内に東六坊坊間東小路や中近世の町屋遺構などが想定された。

今回、店舗改築(奈良大丸)に伴い、98年12月に小トレンチ2カ所を設けて試掘調査を実施したところ、中世瓦器が多量に出土したため、新たに東西34.7m南北1.7m面積59㎡の発掘区を設定して発掘調査を実施した。調査期間は99年1月7日から同14日までである。

2. 遺構

調査区は近現代の攪乱と盛土が著しい。特に調査区中央以西では厚さ60～100cm程の攪乱を被り、それを除去して土器片を含む厚さ約10cmの明茶褐粘質土が現れる。その下が小礫を多く含む黄灰粘質土(地山)である。地山面は東から西へ緩やかに傾斜し(東端で標高約80.5m、

中央付近で約80.0m)、西端近くでやや急激に下がる(約79.4m)。遺構検出は地山面で行い、小穴37基、土坑3基、井戸状遺構1基、溝2条などを検出した。以下、顕著な遺構について報告する。

SD7450 調査区西端で検出した南北溝。東岸を検出した。西岸は調査区外で、溝幅約1.5m以上、深さ0.35m。地山を掘り込んだもので、堆積土は礫を含む茶褐砂質土一層である。14～15世紀の遺物を含む。

SD7451 調査区西端で北壁沿いに検出した東西溝。南岸を2.6mぶん検出した。北岸は調査区外で、幅25cm以上、深さ約10cm。東から西に流れ、SD7450に注ぐ。

SE7452 調査区ほぼ中央で検出した遺構。検出面の直径1.3m、底面で0.9mのほぼ円形を呈し、深さは0.65m(北壁断面によれば1m以上)。井戸か。埋土は上から、かわらけ片を多数含む暗褐土、黄斑暗褐土、粘性の強い暗褐土である。出土遺物の年代から、12世紀後半の遺構と考えられる。

SK7453 SE7452の東約0.7mで検出した中世の土坑。北端は調査区外。

3. 遺物

土器・瓦罫類

遺物の出土量は少ない。土器は包含層から瓦器が整理用コンテナ1箱分出土した。SE7452から12世紀後半の土器が、SK7453から中世の常滑焼の甕破片が多数出土した。瓦罫類は、軒平瓦8500型式(鎌倉時代)と軒丸巴瓦(中世)が各1点、丸瓦が34点(4.3kg)、平瓦が95点(11.9kg)出土した。(山下信一郎)

鹿角製品

SE7452より出土。右側落角を利用したもので、角幹と第一尖からなるが、角幹の先端を欠損する。長さ11.2cm。角幹基部の内外面を金属製工具により平坦に整形した後、3.0cm×1.9cmの方形の孔をあけ、角幹と第一尖ともに内

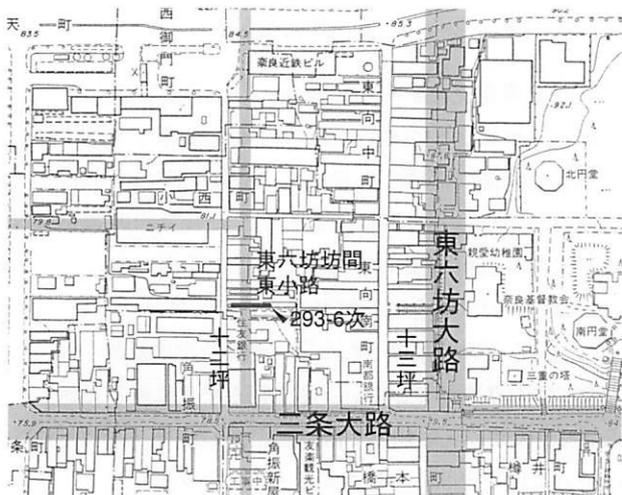


図67 第293-6次調査位置図 1:5000

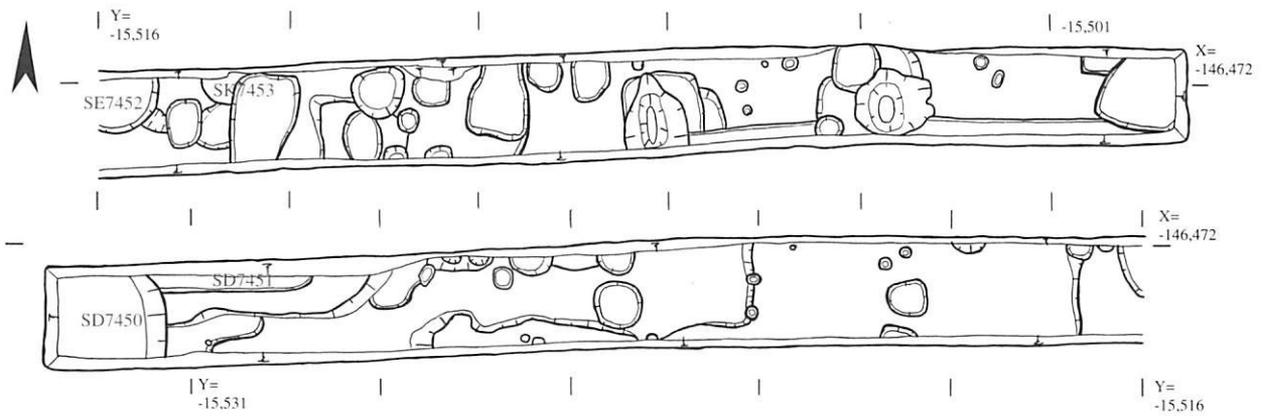


図68 第293-6次遺構平面図 1:120

面側の先端を斜めに切り落とす。切り取られた面は、互いに水平になるようにとられている。用途は不明であるが、側面から先端にかけて摩耗が認められること、内面と外面とでは角坐の摩耗の度合いが著しく異なり、内面側の摩耗が顕著であることなどは、使用状況を推定する材料となろう。

なお、本例ときわめて類似する鹿角製品が、滋賀県米原町入江内湖遺跡で採集されている（梅原末治「珍しい鹿角器」『考古学雑誌』第42巻第3号 1957、佐原真「弥生式時代」『彦根市史』上冊1960、金関恕「図版目録・解説118鹿角製品」『日本原始美術大系』5 1978）。角幹の基部に方孔をもち、角幹と第一尖の先端を尖らせたもので、長さ15.5cm。使用痕が観察されており、方孔に柄を装着し鋏として使用されたとの推定もある。この資料は、弥生時代中期に位置づけられているため、相伴資料の年代との相違など今後課題は残る。（次山 淳）

4. まとめ

東六坊坊間東小路の路心の座標はX=-15,527.6と想定

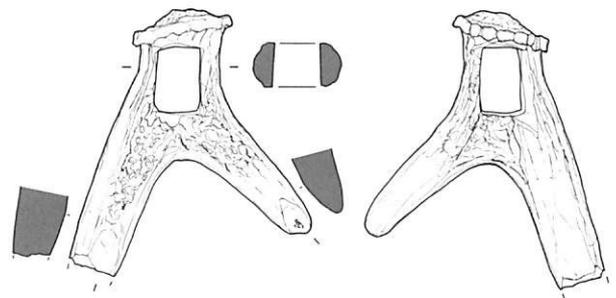


図69 SE7452出土鹿角製品 1:3

されている。東小路の路幅を側溝心々で20尺と考えると、今回検出したSD7450は、東六坊坊間東小路西側溝の想定位置にあたる。SD7450が古代の西側溝を踏襲した中世の溝であることもできよう。しかし、今回、東小路東側溝にあたる遺構は検出しなかった。むしろ、小西通りが遺存地割に由来するとみて、SD7450はその東側の排水溝である可能性もある。SD7450の性格付けについては、当該地域の条坊制の実際とも絡み、今後の調査例の増加を待って結論したい。（山下）

平 城 専 こらむ 欄 ③

◆転任者のイチゴン

10年一昔とはよくいったもので、9年ぶりに戻った研究所は、思っていた以上に変貌していた。たまたま今年は、朱雀門や東院庭園の竣工・公開、奈良市制100周年記念のイベントと'98平城京展の開催など、平城宮跡発掘調査部にとって大きな事業が年度当初から重なったせいかもしれないが、考える間もなしに数ヶ月間が過ぎてしまった。

加えて12月には平城宮跡の世界遺産登録もあった。平城宮跡が、もはや確実に整備活用の段階に入っていると

印象を深くした。自分の庭のような感覚でいた平城宮跡が、別の人の手に渡りつつあるような感じを抱いた。しかし、これが本当の意味で国民の遺跡として還元されつつあるのであれば望ましいことである。

アジア各国との研究交流、とりわけ中国との合同調査の進展は目を見張るものがある。かつてはほとんど手つかずのテーマであったから、この点に関しては、はっきりいって浦島太郎で、もっとも不安に感じた仕事である。都城を研究する組織として極めて重要なテーマだけに、今後の安定した研究体

制づくりが可能かどうか問われそうである。

たぐさんの個別研究会にも驚いた。以前も、発掘報告をまとめる目的で内裏検討会や朝堂院検討会などの合同研究会を開いたことはあったが、所員から個別テーマを募って研究会を保障するシステムは、新しい展開である。主に発掘と報告書の作成に集約されていたノルマが、今やいろいろなところに個別に嫁せられつつあるようでもあり、うがった見方をすれば、エージェンシーの準備が着々と進んでいるようでもある。（T）